九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

論説文におけるテクスト構造の日中対照研究 : 新聞社説を分析資料として

単, 艾婷

https://doi.org/10.15017/1931980

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏　　名　：単　艾婷

論 文 名　：論説文におけるテクスト構造の日中対照研究
―新聞社説を分析資料として―

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、日本語と中国語の論説文の典型とされる新聞社説を取りあげ、日本語学の文章論及びテクスト言語学の観点から、両言語における文章・テクスト構造を体系的に比較対照したものである。「段落構成（一貫性 coherence、統一性 unity)」というマクロ構造と、「文相互の関係（結束性 cohesion)」というミクロ構造を総合して分析を行った。マクロ構造では「題材の配列」及び「統括機能」の観点から、ミクロ構造では「指示」「接続」「反復」「省略」といった形態的指標を手掛かりとした。これらを総合することによって、テクスト構造を立体的に捉えることを目指した。本論文の構成は以下の通りである。

本論文は第 1 章～第 14 章からなり、【第Ⅰ部　研究の現状と本論文の目的】【第Ⅱ部　新聞社説におけるマクロ構造の日中対照】【第Ⅲ部　新聞社説におけるミクロ構造の日中対照】【第Ⅳ部　総合的な考察】に分けて考察を行った。

第 1 章～第 3 章が【第Ⅰ部】である。第 1 章では、本論文の目的、背景を述べ、論文全体の構成を紹介した。第 2 章では、先行研究の概観と本論文の位置付けを示した。第 3 章では、本論文の理論上の枠組み及び研究方法を提示し、本論文で使用した分析資料について説明した。

第 4 章～第 8 章は【第Ⅱ部】である。新聞社説におけるマクロ構造を主に段落構成に注目して分析を行った。第 4 章では、新聞社説の構成の一部である「見出し」について、第 5 章では、段落の捉え方及び段落の間の連接関係について分析を行った。第 6 章では、「題材の配列」の観点から、新聞社説がどのような論理展開をなしているか、どのような「一貫性（coherence)」を備えているのかということについて分析した。日本語の新聞社説の論理展開は「解説→見解→解説→見解→…（A→B→A→B…)」のように、論を進めていくのに対し、中国語の新聞社説は「見解→解説→見解→解説…（B→A→B→A…)」のように展開していくという点で相違が見られた。

第 7 章では、「統括段落の位置」の観点から、新聞社説の統括段落がどのように位置するか、どのような「統一性（unity)」を備えているのかということについて分析した。従来言われてきた通り、日中両言語ともに結論が文章・テクストの最後に出現する傾向があるが、実際に社説のような論説文では、本文の最後 1 か所だけではなく、2 か所または 3 か所にも書き手の主張や結論が出現することが確認された。第 8 章では、新聞社説のテクスト構造において、重要である冒頭文及び末尾文にどのような工夫が施されているのかを分析した。

第 9 章～第 12 章は【第Ⅲ部】である。「文相互の関係」に注目したミクロ構造の日中対照研究を行った。第 9 章では（a)「指示表現」、第 10 章では（b)「接続表現」、第 11 章では（c)「反復表現」、第 12 章では（d)「省略表現」という四つの形態的指標を手掛かりとして、文章・テクストの文脈がどのように形成されるか、どのような「結束性（cohesion)」を備えているのかということについて

分析した。まず全体的に見ると、日本語は中国語と比べて、結束性の表示が低く、文と文を明示的につなぐことが少ないことが分かった。次に、日中両言語の相違点として、日本語の新聞社説は、主に（c)「反復表現」（関連語句）と（d)「省略表現」の結束手段を用いて文相互のつながりを保つことが挙げられる。一方、中国語の新聞社説は、主に（c)「反復表現」(同一語句)、(a)「指示表現」及び（b)「接続表現」の結束手段を通じて文相互の関係性を示すことが明らかになった。

第 13 章及び第 14 章は【第Ⅳ部】である。第 13 章では、マクロ構造とミクロ構造についての総合的な記述・考察を行った。第 14 章では、本論文の結論、研究意義及び今後の課題について述べた。日中両言語の新聞社説におけるテクスト構造の相違は、「読み手」と「書き手」の関係性の違いにあるとの結論に至った。日本語の新聞社説は「読み手中心の説明テクスト」であるのに対し、中国語の新聞社説は「書き手中心の説得テクスト」であると言える。日本語の新聞社説では、読み手が書き手の主張や意見を理解して読むことが期待される。一方、中国語の新聞社説では、書き手が自分の解釈を読み手に提示し、読み手には書き手の提示通りに読むことが期待される。このような「読み手」と「書き手」の主体性の違いが、文章・テクスト構造に反映されている。

本論文は、文章・テクスト構造をマクロ構造とミクロ構造の二側面から体系的な分析を行った。「一貫性（coherence)」「統一性（unity)」「結束性（cohesion)」という三つの観点から多面的なアプローチを試み、総合的に捉えて検討し日中両言語の新聞社説の文章・テクスト構造及び社説のテクストジャンルの特性を解明した。これまで主な研究対象とされてきた語彙や文のレベルを超え、段落や文章・テクスト全体を扱った独自性の高い論文である。特に関連研究が少ない中国語の社説についても詳細な分析を行っており、今後の新たな展開可能性を示唆することができた。